

| | |
|------------------|---|
| Title | 擦文文化の終焉 |
| Sub Title | Chronology and locality of Satsumon (擦文) culture ; with special reference to Ainu culture |
| Author | 高杉, 博章(Takasugi, Hiroaki) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1982 |
| Jtitle | 史学 (The historical science). Vol.52, No.2 (1982. 9) ,p.109(273)- 131(295) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 論文 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820900-0109 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

擦文文化の終焉

高杉博章

目次

- I 問題の所在
 - II 擦文文化の編年と遺跡分布
 - III 擦文文化の地域性
 - IV アイヌ文化の成立過程
- 参考文献

I 問題の所在

考古学・民族学そして文献史学の共通テーマであるアイヌ文化の起源については、これまでそれぞれの立場から系統および成立年代などを中心に論じられてきた。しかしながら、その起源にかかわる根本的問題については、相互の間で見解の一致をみていないのが実状であろう。この見解の相違は、おそらく各分野が相互の接点を追求しながらも性質を異にするデータに基づき、異なる視点から分析を行ってきたことによるものであり、むしろ当然の結果ともいべきであった。

いわゆるアイヌ文化は、考古学的には擦文文化あるいはオホーツク文化にその起源を求められるものとされ、両文化からアイヌ

擦文文化の終焉

文化への転換期は、特に擦文文化との関連上十二世紀から十三世紀にかけてとも（石附一九七六、菊池一九七〇など）、あるいは十五世紀末から十七世紀中葉の間（前田一九七六）ともされている。さらにまた、石狩低地帯以南における擦文文化の終末は十二世紀末から十三世紀前半に求められるとする一方、道東部・北部におけるその終末は十六世紀末から十七世紀初頭にかけてとする見解（大井一九七〇）もある。

民族学的にはアイヌ文化の成立年代にまで言及されることは少ないが、考古学との接点を物質的側面を媒介して追跡していくこととする試みがなされている。アイヌ文化の中核は、構造的にみて社会的側面・宗教的側面・流通経済的側面からなる『クマ祭文化複合体』としてとらえられ、三側面はそれぞれ段階的に成立した可能性が強く（渡辺一九七二）、さらにアイヌ文化の起源をオホーツク文化との関連からみていくとする見解（渡辺一九七四）が、その作業仮説として評価される。一方、アイヌ文化の構成要素を個々の文化要素に分け、それぞれが北東アジア、北太平洋地域においてどのような分布状態を示しているかというグローバルな視点からその起源を考えていくとする見解（大林一九七四）もある。

る。

また、文献史学の立場からは、北海道における土器の消滅年代を流入する鉄製品の量的増大をもたらしたであろう本州人の道南占拠の確立した十五世紀前後に求め、擦文文化の終末もその頃とする見解(海保一九七四b)がある。

ところで、文献史料に基づいて復元しうる最も古いアイヌの社会および文化は、十七世紀中・後期のものであるとされ、シャクシャインの峰起のあった一六六九年前後には、アイヌ社会に五つの地域的結合が認められること、そしてその分布は、一九三〇年頃の墓標の形式分類に基づくアイヌの六大系統の分布と関連性が認められること、また近世史料に現れたチャシンの分布とも極めて類似した分布状態を呈していることが指摘されている(海保一九七四a)。十七世紀における地域的結合および近世におけるチャシと一九三〇年代における墓標とは年代的にも質的にもまったく異なるデータではあるが、もしその分布状態が信憑性をもったものであるとしたら、当時の社会情勢を反映した可能性が十分考えられ、極めて興味深い。

逆上って、アイヌ文化と時間的に連続性を有する擦文文化あるいはオホーツク文化、トビニタイ文化(藤本一九七九a)の分布はどのような状況を呈しており、それは後続するアイヌ文化との関連性をとらえていく上で、どのような意義をもっているのだろうか。本稿では、擦文文化の遺跡分布の分析に基づいて、擦文文化、オホーツク・トビニタイ文化からアイヌ文化へという歴史的变化を辿ってみることにしたい。

II 擦文文化の編年と遺跡分布

擦文文化の指標である擦文式土器の編年については、これまでいくつかの論考が公にされている(例えば駒井編一九六四、佐藤達一九六四、一九七二、石附一九六八、菊池一九七〇、宇田川一九八〇bなど)。それら形態分類に基づく擦文式土器の変遷については、大綱においてほぼ妥当なものと考えてよいようである。しかしながら、こうした編年研究の大部分が、地域性についてあまり問題にしてこなかったため、時間の次元における序列は一応の整理がなされたものの、空間の次元の再構成、換言すれば地域の間の相対関係は決して明らかにされたとは言いがたい状況にある。その意味においては、地域によって擦文文化の終末年代に差異があったか否かについても、十分な検討はなされていなかったと言える。一般的に言われるように、はたして擦文文化は斉一性をもったものだったのだろうか。

そこでまず、いくつかの問題点を検討していく上で基礎になる擦文式土器の編年について概観しておくことにしよう。地域間の相対年代についてふれた編年には、青森・道西部・道東部の三地域を扱った佐藤達夫の編年があるが(佐藤一九七二)、擦文式土器とオホーツク式土器の年代関係をはじめ首肯し得ない点もあるのでここでは敢えて取上げない。

道東部に関しては、常呂川下流域の擦文式土器を分析した藤本強の編年がある(藤本一九七二)。藤本編年は、土器の有するいくつかの基本的要素を抽出し、その分類基準および過程を明示しており、ある程度客観的判断が可能である。また、常呂川下流域と

いう限定された地域における擦文式土器の変遷を扱っており、しかもこの地方は量的にもまとまった資料が蓄積されていて、その蓋然性が高い。このような理由から、私も藤本編年に基づいて東北地方北部の擦文式土器を分類したことがある（高杉一九七七b）。ただし、同じ道東部の場合でも地域によって器形・文様要素など細かい点で常呂地方とは差異が認められることが指摘されており（松田一九八〇）、東北地方北部の場合も同様のことがいえる。各地域の擦文式土器の相対関係は、今後も検討を要するであろう。

ところで、東北地方北部の擦文式土器の分類は、必ずしも型式分類そのものを意図したわけではなく、各地域の相対年代を確認するため、まず編年の確立された道東部との相対関係を検討することが主な目的であった。つまり、擦文文化の終末年代ががどの地域でも同様であり、内容的にも地域差が認められなかったならば、当然編年のにも常呂地方に対比し得るデータが各地域で共通に見出せるはずであろうと考えたわけである。

さて、藤本は常呂地方の擦文式土器を器形と文様の分析に基づいてa~lの十二期に細分し、さらに高坏の有無によってa~dまでを前期、e~hまでを中期、i~lまでを後期というように大別した（Fig. 1）。これに基づいて、東北地方北部では前期から後期の一部に併行するデータの存在を確認したが、その後出土したデータを含め再検討したところ、藤本編年a~lのほぼ各時期に対応するデータが存在する可能性が強くなった。

ここで問題になるのは、特に後期の様相である。藤本編年によ

擦文文化の終焉

ると、後期j・k・lの時期には従来の規格からはずれた文様をもつ土器が多くなるという。また、i期には高坏が、次いでk期を最後に大型鉢形土器が消滅するという特徴があげられている。東北地方北部でも、大型鉢形土器はk期に相当すると考えられる。碓ヶ関村古館遺跡例（Fig. 2）をもって消滅するものと思われる。常呂地方最終期の1期には、粗雑な小型土器が主体となるようである。東北地方北部では、擦文式土器の文様の主要モチーフである鋸歯状文、×状文が施され、焼成・胎土などの特徴では極めて土師器に近い小型土器を主体とする一群が、おそらくこれに対応するのであろう（Fig. 2, 9~11）。以上のことから、編年的には少なくとも道東部と東北地方北部との間では、終末時期に関して差異のないことがほぼ明らかである。

次に、この編年に基づいて前・中・後各時期の遺跡分布をみていくことにしよう。その際、擦文式土器と竪穴住居跡との共存関係を窺い知ることのできるものを基本データとして取上げることにする。

まず、前期の様相からみてゆくと、遺跡分布は道西部のいわゆる石狩低地帯に集中していることがわかる。この地域は、物質面で本州の土師器を指標とする文化の影響が強く認められる。延暦二一（八〇二）年六月二十四日、太政官符に「渡嶋狄等来朝之日。所貢方物。例以雜皮。而王臣諸家競買好皮。」という記事がみられることから、平安時代にはすでに本州と北海道との間で毛皮交易が行われていたことが指摘されている（渡辺一九六六）。今、ここで実証的な説明もなく「渡嶋」を北海道とし、「狄」をアイヌとみ

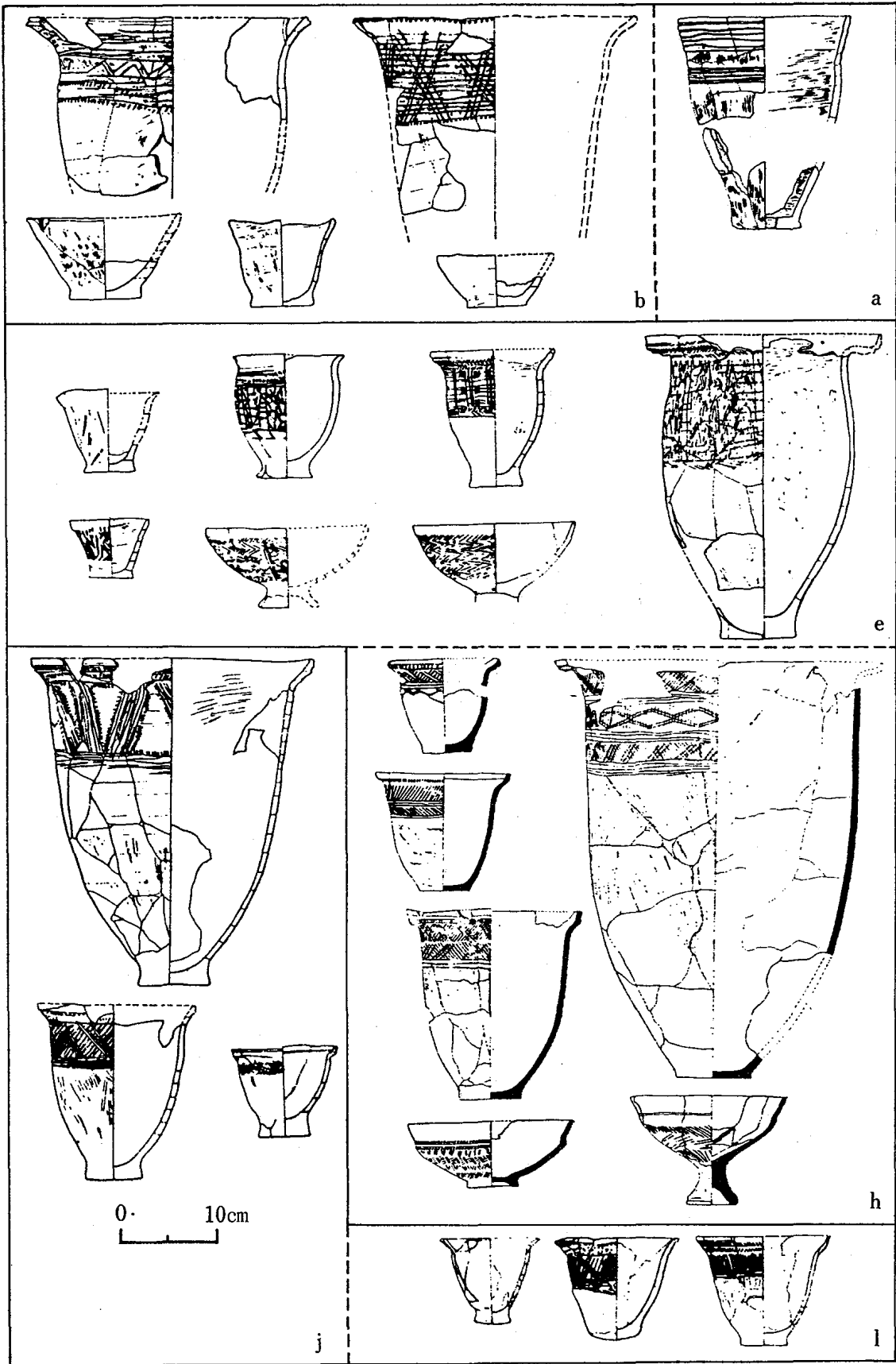


Fig. 1 常呂地方の擦文式土器
a・b＝前期, e・h＝中期, j・l＝後期 (藤本 1972)

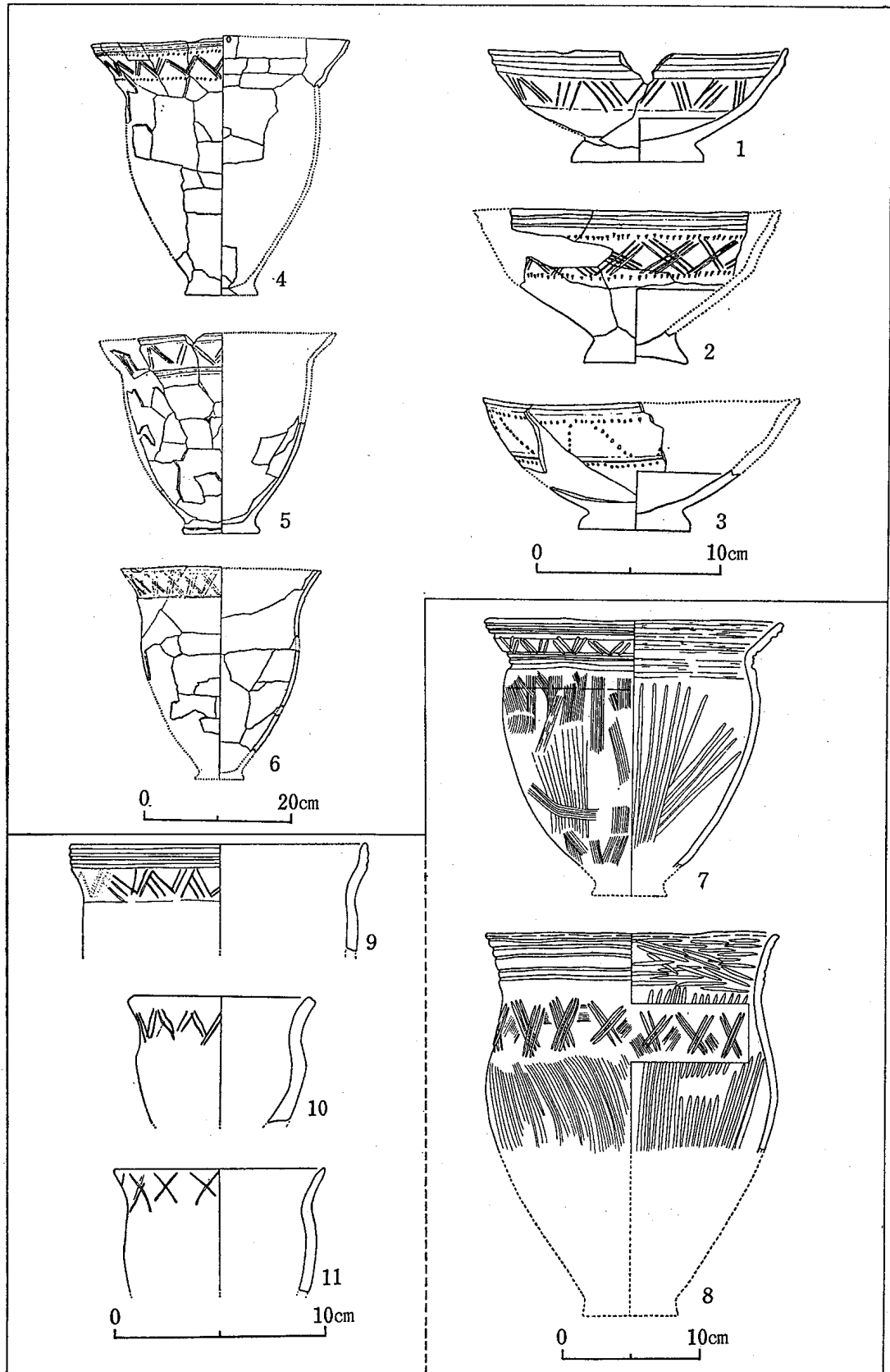


Fig. 2 道南部・東北地方北部の後期擦文式土器
1~6 奥尻町青苗貝塚出土 (佐藤忠 1979), 7・8 碓ヶ関村古館遺跡出土 (青森県 1980), 9~11 木造町石上神社遺跡出土 (高杉 1977 a)

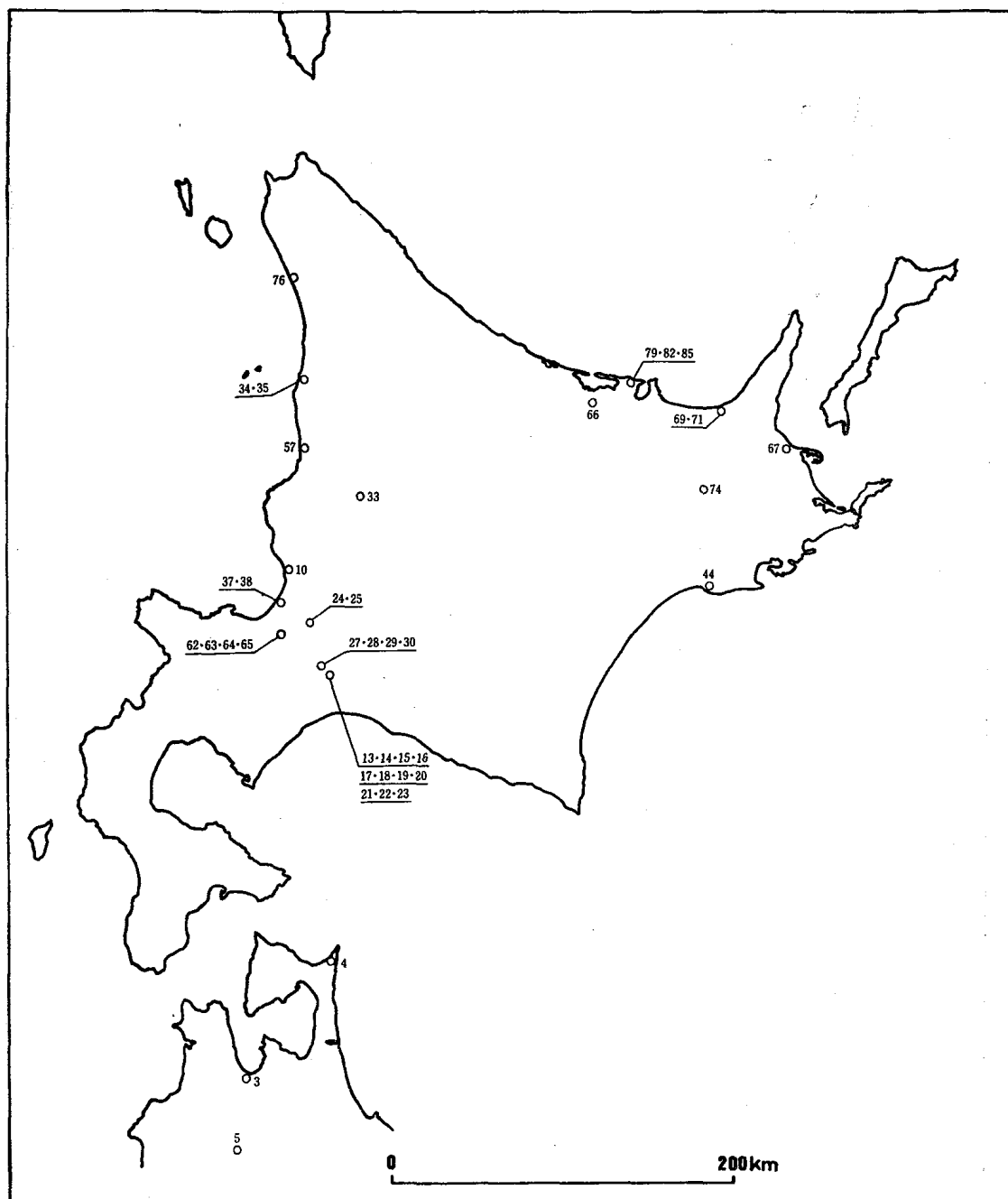


Fig. 3 擦文文化前期の遺跡分布

なしてしまふことにはさしきわりがあるが、北海道における擦文文化成立の状況を考慮に入れれば、従来の文化内容を一変させてしまうほど本州と交渉があったことも十分首肯し得るであろう。そして、擦文文化前期における遺跡の集中度合から考えれば、石狩低地帯はこうした交流の中心地的存在であったことも想定できよう。

道南部では、現在のところ前期に属する竪穴住居跡は検出されておらず、データは散見的である。道東部および北部では、遺跡数は少ないが、編年的には連続性を認めることができるという点から考えると道西部とは内容的に異なる展開を遂げていたものと思われる。東北地方北部でも、編年的には比較的スムーズな変遷が辿れるのであるが、確実に竪穴住居跡に伴った例は極めて少ない。しかし、この事実は、この地域と道東部・北部の様相等質であったことを意味するものではない。

中期になると、道西部の遺跡数は減少し始める。道東部ではこの時期よりデータが増加し、遺跡数はその後半期でピークに達するようである。道北部では前半期の遺跡数は多くないが、後半期にはいると道東部と同様増加の傾向を示している。道南部および東北地方北部とは、前期と様相は大きく変っていない。

後期には、中期後半に引続き道東部に遺跡が集中するが、道北部では遺跡数はやや減少の傾向を示すようである。道西部では中期よりさらに遺跡の存在は稀薄になり、現在のところ竪穴住居跡は確認されていない。また、編年的には、藤本編年j期位に相当する神恵内村観音洞窟(小樽市博物館資料)および千歳市末広遺跡

擦文文化の終焉

三四号・三六号竪穴住居跡覆土(千歳市一九八一、Fig. 29-3・34)の諸例に後続するデータは存在しない。道南部では前・中期と様相は大きく変っていないが、奥尻町青苗貝塚のようにならぬ規模の大きい貝塚を形成するという特殊な例がみられる(佐藤忠一九七九)。アワビを主体とする多量の自然遺物の出土状況から考えると、海産物は交易品として利用された可能性も一応考慮に入れておいてよさそうである(金子浩昌教示)。この地域では、藤本編年K期位に相当すると考えられる奥尻町青苗貝塚(Fig. 29)、瀬棚町利別川口遺跡(加藤一九八一、第一〇図三・一一図一など)、江差町厚沢部川河口遺跡(佐藤隆ほか一九七六、Fig. 4・22)、同町法華寺坂遺跡(大場ほか一九五五、第十七図)、上ノ国町上ノ国遺跡(大場ほか一九六一、第四図)の諸例に後続するデータは検出されていない。東北地方北部でも、前・中期と様相は大きく変っていない。

不備な点が多いが、以上の結果をまとめたのが Fig. 3と5および Tab. 1である。なお、竪穴住居跡の軒数は時期決定の不可能なものもあって正確を期すことができないので敢えて呈示しなかったが、道西部、特に石狩低地帯では前期前半、道東部では中期後半から後期にかけて、道北部では中期後半にそれぞれピークをもつ。

これで、従来しばしば言われてきたように、擦文文化中期を境に、道西部における遺跡数が減少するのに対して、道東部・北部における遺跡数は増加の傾向を示すという事実関係は、一応妥当なものであることが明らかになった。しかし、中期に至って石狩

Tab. 1 擦文文化の主要遺跡

- 註 (1) 文献で確認できなかった遺跡については掲載していないので、擦文時代の全遺跡を網羅したものではない。
 (2) 竪穴住居跡との伴出関係が明確でないもの、時期決定が不可能であったものについても掲載していない。

| 遺跡番号 | 遺跡名 | 前期 | 中期 | 後期 | 文献 |
|------|----------|----|----|----|--------------------|
| 1 | 青森市近野 | | | ○ | 青森県 1975 |
| 2 | 同 三内 | | ○ | | 青森県 1978 |
| 3 | 同 沢田A | ○ | | | 桜井 1973 |
| 4 | 東通村稲崎 | ○ | | | 江坂 1953 |
| 5 | 碓ヶ関村古館 | ○ | | ○ | 青森県 1980 |
| 6 | 蓬田村小館 | | ○ | | 桜井 1971 |
| 7 | 網走市イナウウシ | | | ○ | 網走向陽高校 1966 |
| 8 | 阿寒町下仁々志別 | | | ○ | 沢ほか 1965 |
| 9 | 旭川市神居古潭 | | ○ | | 河野広ほか 1959 |
| 10 | 厚田村聚富土上 | ○ | | | 宇田川 1965 |
| 11 | 別海町浜別海 | | | ○ | 北構・岩崎編 1972 |
| 12 | 美深町紋穂内 | | ○ | | 山崎 1970 |
| 13 | 千歳市千歳神社 | ○ | | | 河野広 1932, 石川 1979 |
| 14 | 同 ふ化場1 | ○ | | | 千歳市 1979 |
| 15 | 同 ママチ | ○ | | | 石川ほか 1971 |
| 16 | 同 長都 | ○ | | | 石川 1979 |
| 17 | 同 蘭越 | ○ | | | 大場ほか 1967 |
| 18 | 同 祝梅 | ○ | | | 石川 1979 |
| 19 | 同 祝梅三角山D | ○ | | | 千歳市 1978b |
| 20 | 同 末広 | ○ | | | 石川 1979, 千歳市 1981 |
| 21 | 同 ウサクマイB | ○ | | | 石附編 1974, 千歳市 1979 |
| 22 | 同 ウサクマイK | ○ | | | 千歳市 1978a |
| 23 | 同 ウサクマイN | ○ | | | 石附編 1977 |
| 24 | 江別市飛鳥山 | ○ | | | 後藤寿 1935 |
| 25 | 同 志文別 | ○ | | | 同上 |
| 26 | 遠軽町寒河江 | | | ○ | 米村 1972 |
| 27 | 恵庭市公園 | ○ | | | 大場ほか 1966 |
| 28 | 同 中島松 | ○ | | | 同上 |
| 29 | 同 西島松B | ○ | | | 同上 |
| 30 | 同 下島松 | ○ | | | 同上 |
| 31 | 枝幸町ホロナイポ | | ○ | ○ | 佐藤隆ほか 1980, 1981 |
| 32 | 同 ウエンナイ | | ○ | ○ | 後藤守 1933 |
| 33 | 深川市東納内 | ○ | ○ | | 野村編 1969, 1977 |

| | | | | |
|----|------------|---|---|---------------------|
| 34 | 羽幌町チライベツ | ○ | ○ | 石附 1972 |
| 35 | 同 天売 | ○ | ○ | 関ほか 1969 |
| 36 | 初山別町初山別 | | ○ | 関 1969 |
| 37 | 石狩町紅葉山25号 | ○ | | 吉崎ほか 1975 |
| 38 | 石狩町ワッカオイC | ○ | ○ | 横山ほか 1975 |
| 39 | 北見市中ノ島 | | ○ | 北見郷土博物館 1978 |
| 40 | 釧路市東釧路 | | | 沢ほか 1969 |
| 41 | 同 東釧路煉乳工場裏 | | | ○ 宇田川 1979 |
| 42 | 同 北斗 | | | ○ 沢・西編 1975 |
| 43 | 同 貝塚町1丁目 | | ○ | 沢ほか 1974 |
| 44 | 同 緑ヶ岡 | ○ | | 大井 1972 |
| 45 | 同 春採台地 | | | ○ 沢ほか 1981 |
| 46 | 同 STV | | | ○ 沢編 1972 |
| 47 | 女満別町湖南 | | ○ | 大場ほか 1960 |
| 48 | 同 豊里 | | | ○ 同上 |
| 49 | 紋別市チカプノツ | | ○ | 小柳ほか 1971 |
| 50 | 同 栄 | | ○ | 堅田ほか 1978 |
| 51 | 同 ウブナイ | | | ○ 佐藤和ほか 1980 |
| 52 | 中標津町俵橋 | | | ○ 大沼 1972 |
| 53 | 名寄市智東 | | | ○ 氏江ほか 1979 |
| 54 | 根室市西月ヶ岡 | | | ○ 八幡ほか編 1966 |
| 55 | 同 温根沼関江谷 | | | ○ 児玉ほか 1956 |
| 56 | 小平町小平 | | ○ | 関 1971 |
| 57 | 同 オピラウシュベツ | | ○ | 峰山・宮塚編 1981 |
| 58 | 音別町チノミ | | | ○ 富水 1970 |
| 59 | 同 ノトロ岬 | | ○ | 同上 |
| 60 | 雄武町開生 | | ○ | 山崎ほか 1965 |
| 61 | 羅臼町植別川 | | ○ | 豊原ほか 1981 |
| 62 | 札幌市K446 | ○ | | 上野編 1979 |
| 63 | 同 K460 | ○ | | 上野編 1980 |
| 64 | 同 真駒内種畜場 | ○ | | 後藤寿 1937 |
| 65 | 同 N162 | ○ | | 上野編 1974 |
| 66 | 佐呂間町西高台 | ○ | | ○ 佐藤忠 1966 |
| 67 | 標津町伊茶仁 | ○ | | 大沼 1972 |
| 68 | 同 伊茶仁B | | ○ | 石附編 1973 |
| 69 | 斜里町ピラガ丘I | ○ | ○ | 斜里町 1970 |
| 70 | 同 ピラガ丘II | | ○ | ○ 斜里町 1972 |
| 71 | 同 ピラガ丘III | ○ | | 斜里町 1976 |
| 72 | 白糠町和天別川河口 | | ○ | ○ 富水 1968a, b, 1969 |
| 73 | 大樹町大樹晩成 | | ○ | 大場ほか 1965 |

| | | | | | |
|----|-------------|---|---|---|---------------------|
| 74 | 弟子屈町下鑑別 | ○ | | | 沢ほか 1971 |
| 75 | 同 矢沢 | | ○ | | 沢・松田編 1977 |
| 76 | 天塩町川口基線 | ○ | ○ | | 河野本 1964, 大場ほか 1971 |
| 77 | 常呂町朝日トコロ貝塚 | | | ○ | 駒井編 1963 |
| 78 | 常呂町岐阜第1 | | ○ | ○ | 駒井編 1963 |
| 79 | 同 岐阜第2 | ○ | ○ | ○ | 東京大学1972, 藤本ほか1977 |
| 80 | 同 岐阜第3 | | ○ | ○ | 東京大学 1977 |
| 81 | 同 ライトコロ川口 | | ○ | ○ | 東京大学 1980 |
| 82 | 同 栄浦第1 | ○ | ○ | | 駒井編 1963 |
| 83 | 同 栄浦第2 | | ○ | | 駒井編 1963, 東京大学 1972 |
| 84 | 同 トコロチャシ南尾根 | | ○ | | 藤本編 1976 |
| 85 | 同 ワッカ | ○ | ○ | ○ | 東京大学 1972 |
| 86 | 苫前町香川B | | ○ | | 大場ほか 1963 |
| 87 | 豊富町豊富 | | ○ | | 呪玉ほか 1959 |
| 88 | 浦幌町十勝太 | | ○ | | 赤沢 1967 |
| 89 | 同 十勝太若月 | | ○ | ○ | 石橋ほか 1974, 1975 |

低地帯以南における擦文文化の担い手が、道東北部へ進出したとする解釈（大井一九七〇）も、本州文化の影響によって石狩低地帯以南の物質文化の内容が変化したとする解釈（前田一九七六）も、その依拠する編年観には理解し難い点が多く問題が残る。

次に、オホーツク文化の遺跡分布は、时期的傾向も考慮に入れなければならないが、かなり特徴的であり、北は稚内周辺、太平洋岸では厚岸付近までの海岸部に限られる（Fig. 6）。また、トビニタイ文化の遺跡分布は海岸部と内陸部に広く分布が認められ、遺跡立地は極めて多様化しているとされる（Fig. 7）。そして、それは基本的には水中・水辺の資源を求めた立地ではあるけれども、一定の資源獲得のシステムを作り出し得なかった結果を反映したものであると指摘されている（藤本一九七九a）。

擦文文化とオホーツク文化との間には、生業および遺跡立地をはじめ文化内容に大きな差異が認められる。しかしながら、後述するアイヌ文化とのつながりを想定した場合、巨視的には、道東部に中心をもつ擦文文化後期の遺跡分布の様相はオホーツク文化あるいはトビニタイ文化とかなり密接な関係を保っていたことを示唆しているのではないだろうか。

III 擦文文化の地域性

再三述べるように、道南部における土器の変遷は極めて断続的で、それに伴う遺構形態は不明確であり、道西部でも中期以降の様相は確かではない。石狩低地帯以南における擦文文化最終末期（藤本編年1期）前後の様相は必ずしも明らかとは言えないわけ

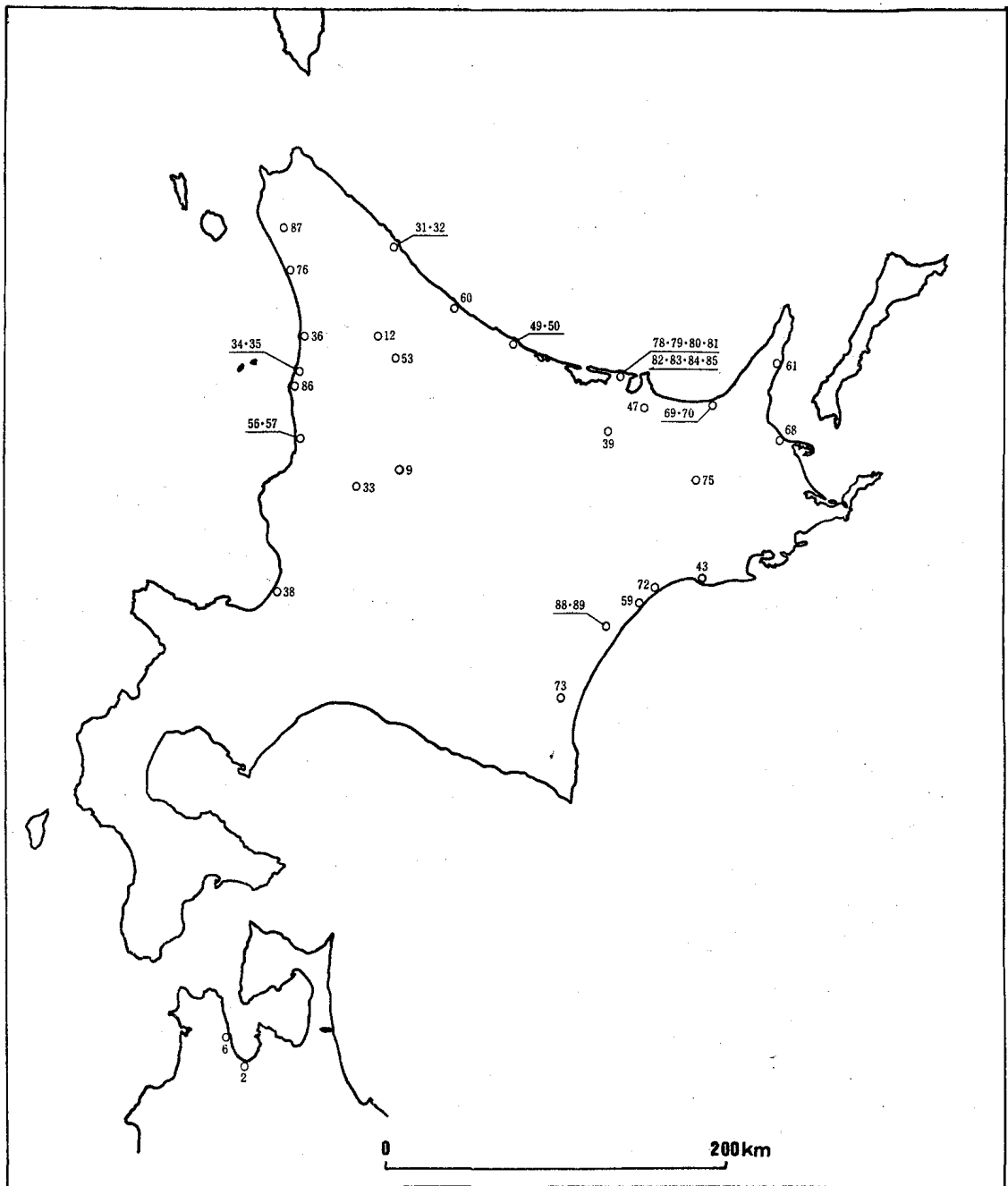


Fig. 4 擦文文化中期の遺跡分布

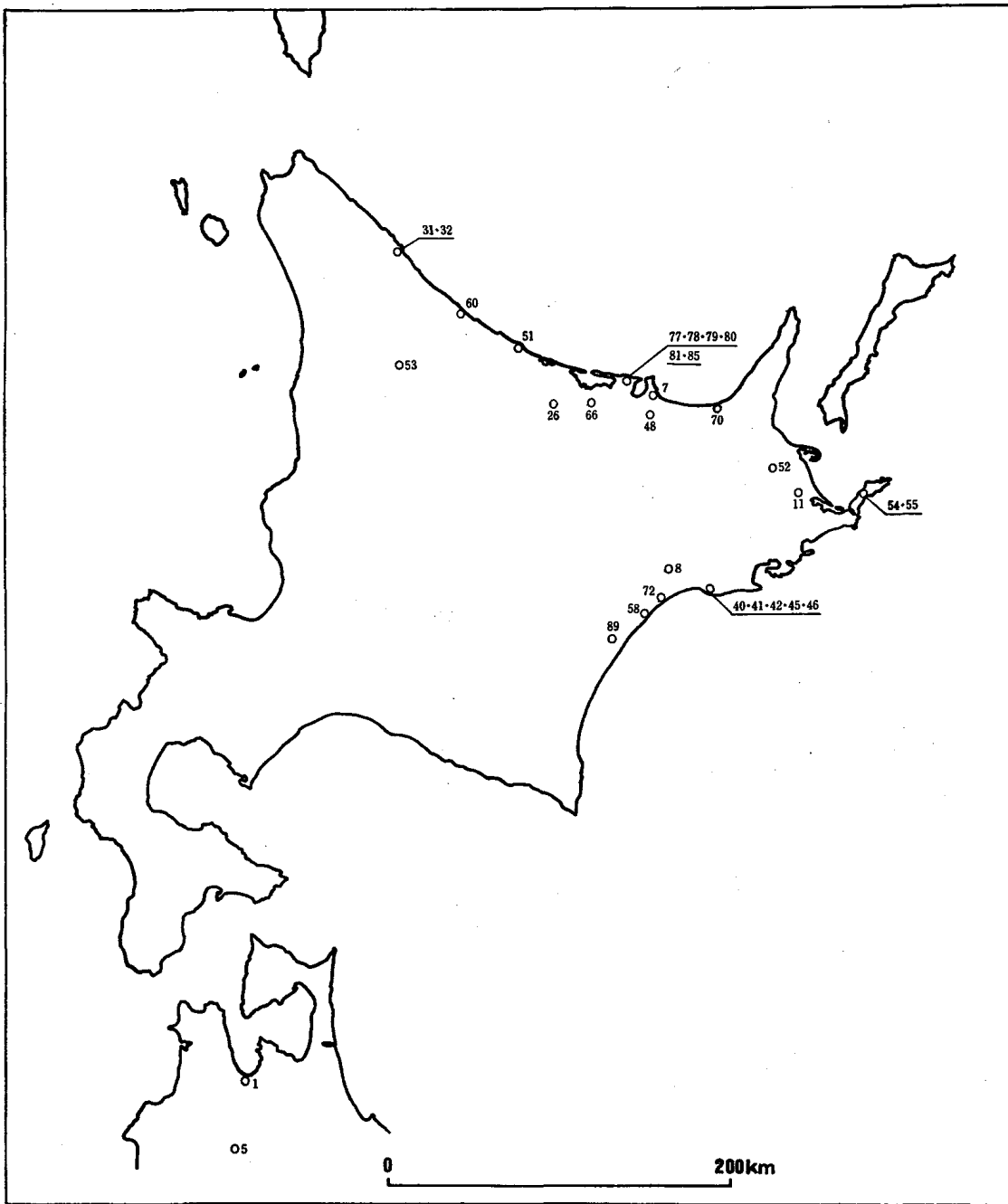


Fig. 5 擦文文化後期の遺跡分布

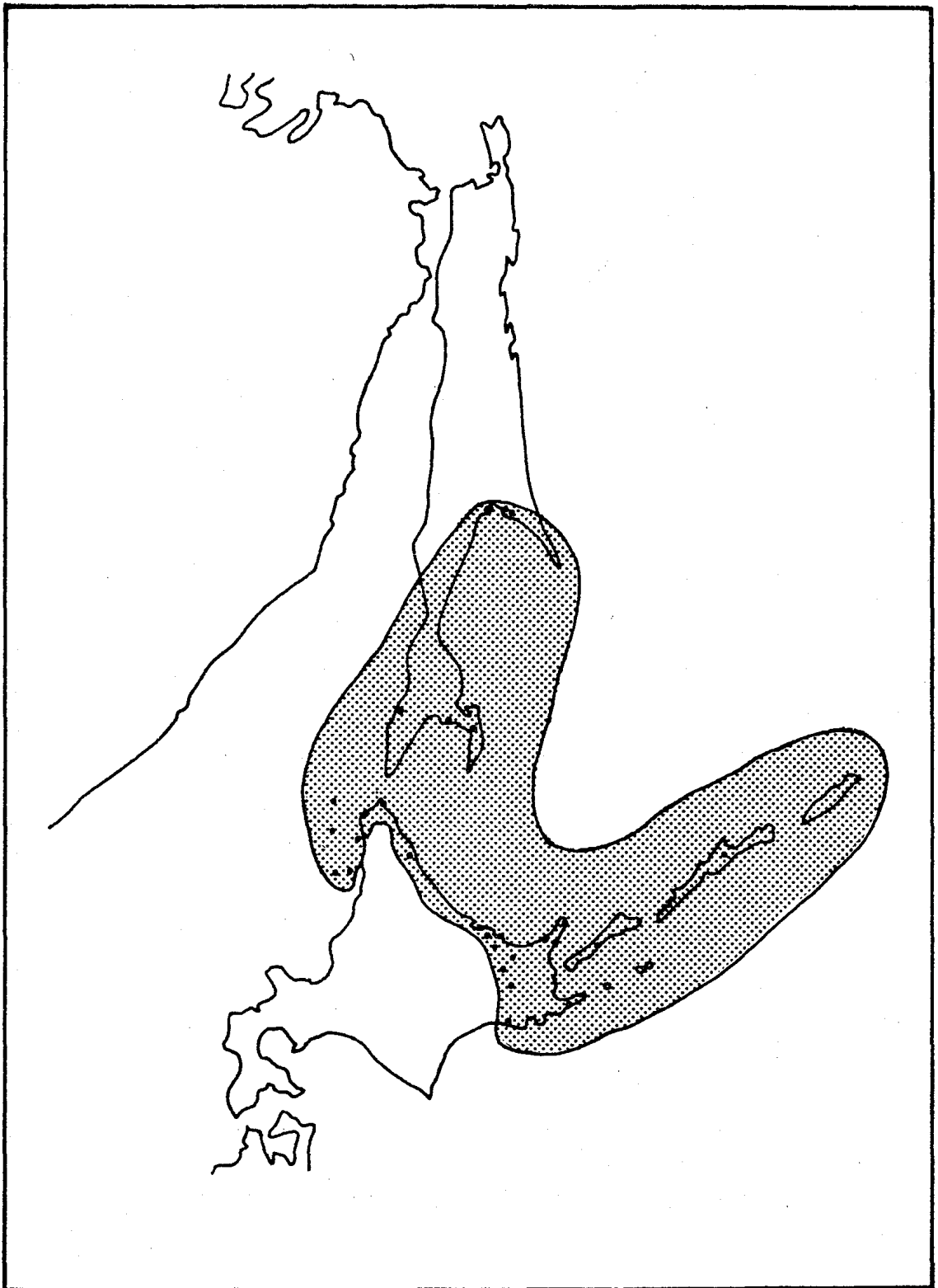


Fig. 6 オホーツク文化の遺跡分布 (大塚ほか 1975)

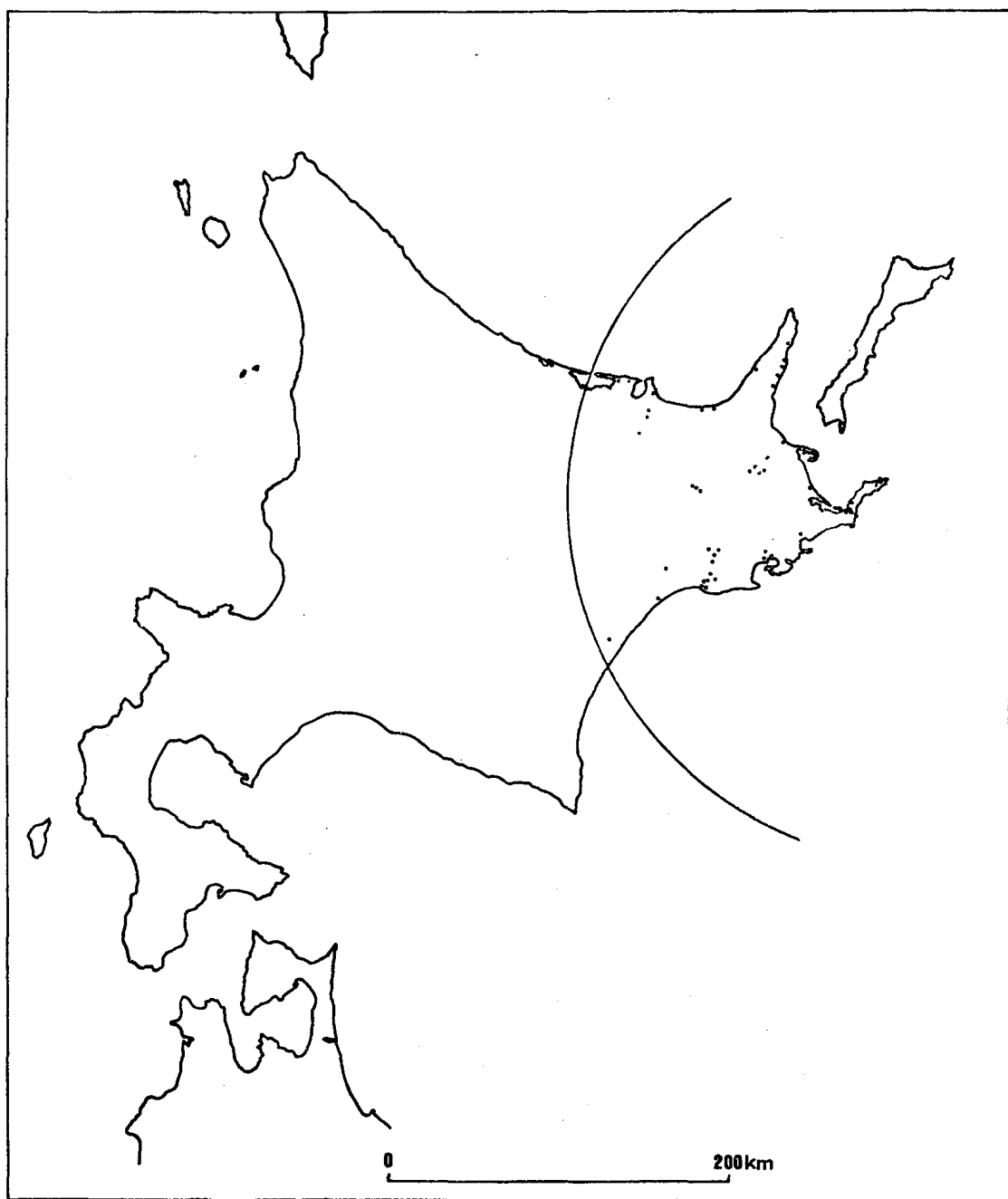


Fig. 7 トビニタイ文化の遺跡分布 (藤本 1979a)

である。従って、これらの地域と道東部・北部との間では一ないし二型式位の時期差を考慮しておいてよいのかもしれない。それにしても、先にふれた全道的な編年によれば同一時期ということになってしまふであろう。

今、先にふれた大井晴男や前田潮の見解に従うと、擦文文化中期以降石狩低地帯以南では、物質文化が一変し、道東部・北部とは内容的に異なる文化が展開したということになってしまふわけであるが、これは、そもそも各地域における擦文文化の様相が、成立当初から性質を異にしていたことに起因すると考えるべきものだったのである。その検討を十分なしえなかつた結果として、型式的に特定の時期だけ限られた地域において存続期間が長かつたという歪曲的な解釈を行つてしまつたものと思われる。いずれにせよ、擦文文化からアイヌ文化への動態を把握してゆく手続きとしては、有効なものとは言えないようである。

遺跡の分布状態から判断する限り、擦文文化成立当時には、石狩低地帯の人口密度はかなり高かつたことが推定される。特にこの地域においては、他地域にくらべて本州の土師器を伴う文化の影響を濃厚に認めることが可能である。その本州文化の受容に基づき擦文文化の成立は、おそらく石狩低地帯における縄縄文化の担い手の生活基盤が変質したことを意味しているのであろう。狩猟・漁撈・採集に依存していたと考えられる縄縄文化の担い手が、基本的には農耕を基盤としていたはずの本州文化の担い手の生活形態を受け入れたのには、それなりの理由があつたはずである。しかし、擦文文化期において、農耕が経済的基盤であつた

という事実を、必ずしも積極的に想定できない以上、少なくとも前期の段階には、例えば造り付けのかまどをもつ竪穴住居跡に密接に関連する生活物資―当然穀物も含まれていたものと推定する―が移入されてい違いはない。九世紀にはすでに、北海道と本州との間に交易関係があつたことは先にも述べたとおりである。

擦文文化中期の段階において、遺跡の分布状態が大きく変化した、その中心が石狩低地帯から道東部・北部に移つてくるという事実は、石狩低地帯において一旦変質した生活基盤が維持し得なくなつてきたことによるのではないかと推定される。常呂地方の状況をみると、前期には竪穴住居跡の出土例は少なく、かまどが設けられることも多くない(藤本一九七九b)。これは、道東部に於ける一般的状況といふことができるようである。中期以降の竪穴住居跡は、(1)かまどだけのもの、(2)かまどと炉を伴うもの、(3)かまども炉もたないものの三形態があるが、(2)のケースが一般的である。

また、石狩低地帯では、擦文文化成立段階において東北地方北部の土師器のセット関係をほぼそのままの形で踏襲した。その段階では、ロクロ成形の坏形土器を伴うケースが多かつたが、その坏形土器も次第に擦文化したものがみられるようになる。これに対して、東北地方北部では、前期から後期に至るまで明確な伴出関係を知ることのできる例は少ないとはいえ、擦文式土器のみでセットを構成することはなく、坏形土器は現在のところ確認されていない。この地域における擦文文化は、わずか土器にのみその特徴を残し、物質面では本州の平安時代を中心とする文化と次第

に軌を一にしながら北海道とは異なる展開を遂げていったものと考えられる。

最近、枝幸町ホロナイポ遺跡（佐藤隆ほか一九八〇）や奥尻町青苗貝塚（佐藤忠一九七九）より韃羽口の出土が報告され、擦文文化期において鍛冶の技術が普及していた可能性が指摘されている（菊池一九七九）。それによれば、十八遺跡計三六軒の竪穴住居跡より刀子をはじめとする鉄製品が出土していることになるが、これらがすべて自製品であったとは考え難く、おそらくその大半は交易によってもたらされたものとみなした方がよいのではないかと思われる。前期の段階に、石狩低地帯を中心として本州文化を受容して成立した擦文文化は、中期以降には道東部・北部を中心にその交易関係を持続しながら新たな展開、適応を遂げていったに違いない。

擦文文化後期の遺跡分布は、道東部のオホーツク海側および太平洋側に密である。しかしながら、少なくとも土器でみる限り、道西部・南部においても、東北地方北部においても擦文文化は存続していた。その終末年代について検討を加えておこう。

石附喜三男は、神恵内村観音洞窟において十四世紀代の珠洲系陶器と終末期擦文式土器が層位的に出土したという事実から、擦文文化の終末は十五世紀代には達しないと、土器の型式分類に基づいてその終末年代を十二世紀から十三世紀初頭に求めた。しかし、この観音洞窟における層的事実は、あくまで擦文文化が十五世紀までは存続しないという事実関係を示唆しているにすぎない。また、菊池徹夫は、擦文式土器の消滅は平安時代末から鎌

倉時代における特に日本海沿岸航路による急激な商品経済の発展と津軽安東氏の台頭という事実が深く関係しているとし、その終末年代を十二世紀おそくも十三世紀の間とした。だが、この見解は、考古学的にみても文献史学上の一般的解釈からみてもかなり難点があると言わざるをえない。

津軽地方から出土した陶磁器の分析によると、十二・十三世紀に日宋貿易によって北九州・瀬戸内海沿岸・畿内・鎌倉などに多量に運ばれた陶磁器が津軽地方では検出されないという事実は、日本海の海上交易の未発達を示すものであるという。そして、日本海沿岸地域の政治的・経済的勢力の発展に伴って津軽地方に大量の陶磁器がもたらされるのは、十三世紀後半以降であるとされる（佐々木一九七九）。これは、北海道内に珠洲系陶器が本格的に流入しはじめるのが、十四世紀から十五世紀前半代であると見る見解（吉岡一九七九）とも大きくくい違ってはいない。また、例えば『十三往来』には「夷船京船群集」という記載があり、こうしたいくつかの史料から十四世紀前半における津軽安東氏の繁栄を窺えることから、この時期は、日本海沿岸航路発展の最初段階にあったとみて大過ないであろう。

これらの事実関係から、擦文文化の終末は十三世紀後半から十四世紀前半の間求められ、それは、日本海沿岸航路による商品流通の発展に伴い当然その影響を受けたであろう擦文社会の中で、急速に物質的変化が生じたことによるものと考えられる。しかも、その年代は、各地域間において大幅な差異を認める必要はないであろう。

IV アイヌ文化の成立過程

アイヌの社会組織は、近世以降著しい変化を受けており、その歴史的变化を明らかにしていくことが必要であると指摘されたことがある(杉浦一九五二)。それと同じように、アイヌ文化を構成する諸要素も時代背景を考慮に入れながら歴史的变化をとらえてゆくことが必要であろう。その意味においては、先にふれた一九三〇年頃の墓標の形式に基づくアイヌの六大系統の分布と一六六九年前後のアイヌ社会における五地域集団の分布との近似性という事実関係には、慎重に対処していかねばならない。

なお、宇田川洋は、「北海道の地名に残るチャシ史料集成」(一九八〇a)の中で、海保嶺夫の扱わなかった近世史料を含めてチャシの分布図を作成し、海保の指摘したようなチャシの分布の傾向は認められず、それに基づく十七世紀中・後期のアイヌ社会の五地域集団との関連は、直接的には結びつけられないと述べている。チャシを概括的に扱えば、それ自体年代にはかなりの幅をもっている。しかしチャシの郭の活用は世帯共同体的であり、使用年数も数百年という長期に及ぶものではないという指摘もあり(本堂一九七七)、時代によって、分布状況あるいは機能をも異にした可能性は十分考えられる。この点、近世史料を網羅的に集成し、チャシの使用年代に配慮することなく作成した分布図に基づく宇田川の指摘は、必ずしも妥当なものとはいえない。

さて、海保によると、一六六九年前後のアイヌ社会には次の五地域集団がそれぞれ当時の史料に「惣大将」・「惣乙名」と記載

された首長を統率者として成立していたという (Fig. 8)。

(1) シュムクル

札幌と夕張を結ぶ線以南の石狩低地帯と新冠町以北の日高地方より構成される。

(2) メナシクル

静内町以南の日高地方より十勝・釧路・厚岸までの地域より構成される。

(3) 石狩アイヌ

石狩川によって結ばれており、石狩平野一帯と留萌支庁南部より構成される。

(4) 余市アイヌ

山丹交易のルートに沿って形成されたもので、余市・天塩・宗谷・利尻などより構成される。

(5) 内浦アイヌ

国縫より尻岸内までの内浦湾沿岸地帯で構成される。

そして、この五地域集団は、文献史的にみて十七世紀中・後期に最も多く使用されたと推定されるチャシの分布状態とある程度共通したまとまり方を示しているという海保の指摘については既にふれたところである。堡塞遺構としての性格をもつチャシ発生要因については、狩猟・漁撈社会の猟(漁)場における侵犯に基く紛争に求められると言われている。すなわち、主たる経済的基盤を狩猟・漁撈・採集に依存する民族においては、食料資源の確保・管理は彼等の死活に関わる問題であり、そのため領域の排他的占有に対する侵犯は紛争に発展する原因となり、チャシもそ

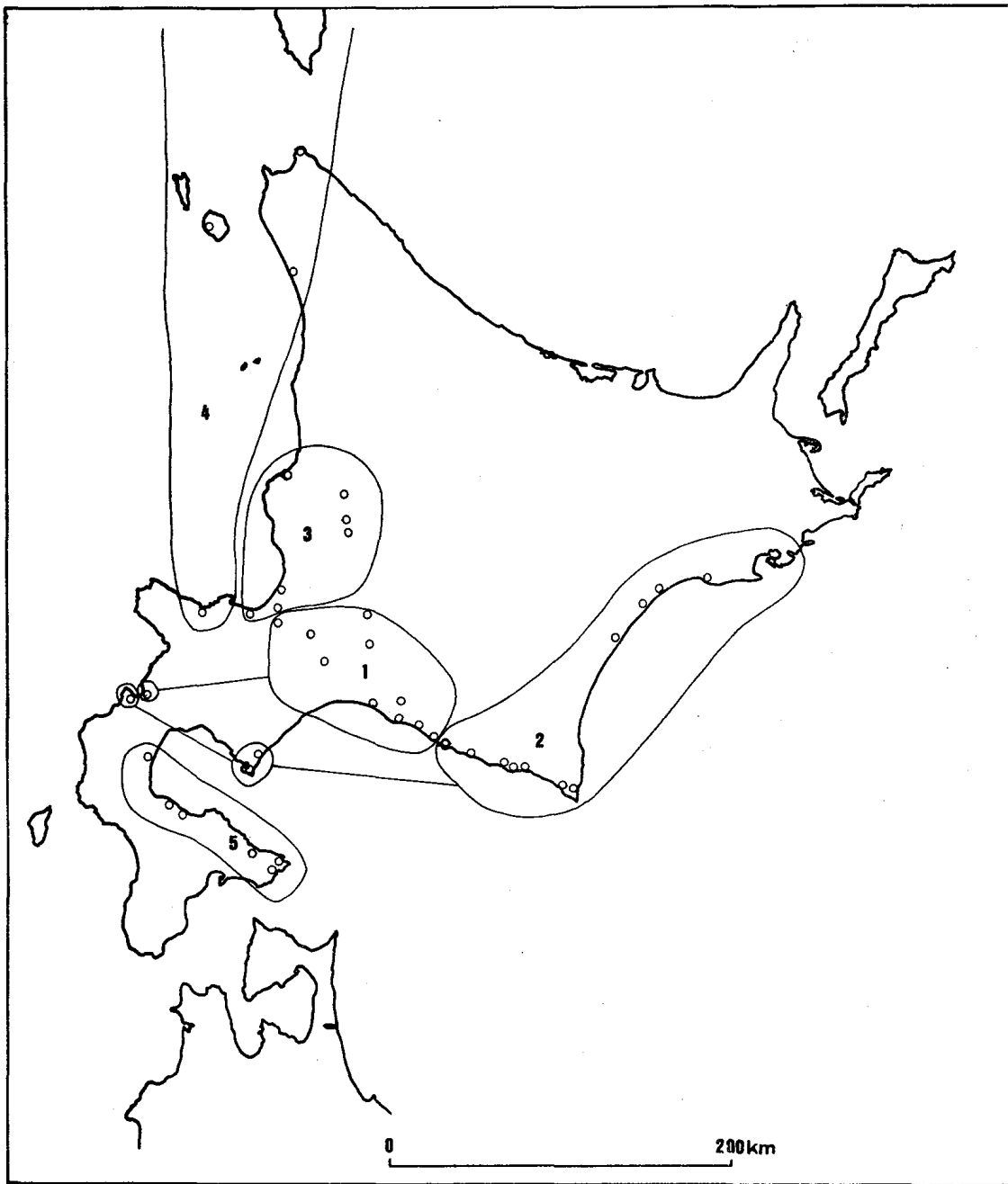


Fig. 8 17世紀のアイヌ社会における5地域集団
1. シュムクル, 2. メナシクル, 3. 石狩アイヌ, 4. 余市アイヌ, 5. 内浦アイヌ
(海保 1974)

のような紛争に備える意味で発生してきたと思われる点があるとされる(鈴木一九六五)。

以上の諸点から考えると、十七世紀中・後期におけるアイヌ文化の地域性は、一種の政治的結束によるものであった可能性が極めて強く、それ以前の社会とは異なる地域的まとまりであったことが推定される。その分布状態は、アイヌのコタンの分布状態などとの関連からも検討する必要があるだろうが、前代のいずれの文化とも共通性が認められない可能性が強い。擦文文化が終末をむかえたと考えられる十三世紀後半と十四世紀前半から十七世紀中頃までの間は、考古学的に空白部分が多い。しかし、擦文・オホーツク・トビニタイ文化からアイヌ文化へという変遷のあったこの時期は、単に物質的変化ばかりではなく、大きな社会的変化が起ったことが想定される。

しばしば「アイヌ固有の文化は何か」という問いかけがなされるが、物質的側面からとらえる限り、アイヌ文化の所産と考えられるものは、チャンあるいは物送り場など主に近世に属する遺跡・遺構を通してしか確認できない。そこから出土するのは、特に十七世紀以降日用品をはじめとする本州製品が大きな割合を占めてくる。だが、アイヌの諸遺跡より出土する本州製品の多寡あるいはアイヌ自製品の有無をもってアイヌ文化の本質的要素を規定していくことはできない。十七世紀前後を境として、本州製品の移入量が増加するという現象がまさしくアイヌ文化の実態を反映する事実だったはずであり、そのような結果をもたらした歴史的背景を時間の次元を通して着実に把握していくことが先決問題で

擦文文化の終焉

あろう。また、アイヌ文化を構成する個々の要素を検討する際にも、直ちに大陸にその起源を求めたり、本州のより古い時代の文化に関連性を求めることが多いが、基本的には、まず前代の擦文文化、オホーツク文化との比較、検討が必要であろう。

脱稿後、次の文献に接した。

- (1) 『斜里町文化財調査報告』Ⅰ(一九八一)
- (2) 海保領夫一九八二「擦文文化の文献史的解釈」『物質文化』

三八

文献(1)に収録されている斜里町須藤遺跡では、擦文式土器のみを出土した堅穴住居跡が十二軒、擦文・トビニタイとが共伴した堅穴住居跡が十七軒発掘されており、時期は中・後期である。また、擦文中期の所産と考えられる(トビニタイ土器が共伴しているが)第十八号堅穴住居跡では、ヒグマとアザラシ類の頭部を住居内に持ち込んで儀礼を行ったことが推定されている。道東部の特色と考えてよいのではないだろうか。

文献(2)について、今詳細な論評をする紙数はないが、海保は本州の擦文文化の分布状況に着目し、それが安東氏の支配領域とかなり一致することから、安東氏が擦文文化を基盤として勢力圏を編成していたと説いている。この文章のみからは十分にその意図を理解できないが、北海道とは決して同一ではありえなかったこの地域における擦文文化の内容を考えた場合、安東氏と擦文文化の担い手との関連については、さらに仮説を検討する必要があるう。

参考文献

網走向陽高校一九六六「北浜イナウウシ竪穴群発掘調査報告書」

赤沢威一九六七「北海道十勝郡浦幌町十勝太遺跡調査報告」『人類学雑誌』七五(2)

青森県教育委員会一九七五「近野遺跡発掘調査報告書」(Ⅱ)

一九七八「青森市三内遺跡」

一九八〇「碓ヶ関村古館遺跡」

千歳市教育委員会一九七八a「苗別川流域における考古学的調査」

一九七八b「祝梅三角山D遺跡における考古学的調査」

一九七九「ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査」

一九八一「末広遺跡における考古学的調査」(上)

江坂輝弥一九五三「青森県下北半島稲崎遺跡調査報告」『古代』一二

藤本強一九七二「常呂川下流域の擦文土器について」『常呂』

一九七九a「トビニタイ文化の遺跡立地」『北海道考古学』十五

一九七九b「道東・常呂川流域の擦文文化」『どるめん』

一一二

藤本強編一九七六「トコロチャシ南尾根遺跡」

藤本強ほか一九七七「岐阜第二遺跡」

後藤守一九九三「北見国枝幸郡枝幸町の遺跡について」『蝦夷往来』一〇

後藤寿一九九五「石狩国江別町の竪穴住居跡について」『考古学雑誌』二五(2)

一九三七「札幌市及其付近の遺跡・遺物の二・三に就て」『考古学雑誌』二一七(9)

本堂寿一九七七「東北におけるチャシ論史考」『北奥古代文化』九

石橋次雄ほか一九七四「十勝太若月―第二次発掘調査―」

一九七五「十勝太若月―第三次発掘調査―」

石川徹一九七九「続千歳遺跡」

石川徹ほか一九七一「ママチ遺跡」

石附喜三男一九六八「擦文式土器の初現的形態に関する研究」『札幌大学一般教養部紀要』一

一九七二「チライベツ遺跡」

一九七六「擦文式文化の終末年代に関する諸問題」

「江上波夫教授古稀記念論集」考古・美術篇

石附喜三男編一九七三「伊茶仁遺跡」B地点発掘報告書

一九七四「ウサクマイ遺跡―B地点発掘報告書」

一九七七「ウサクマイ遺跡―N地点発掘報告書」

海保嶺夫一九七四a「一七世紀のアイヌ社会における地域性」

『物質文化』二三

一九七四b『日本北方史の論理』

堅田直ほか一九七八「紋別市栄遺跡の発掘調査」『もうぺっと』

九

加藤邦雄一九八一「瀬棚町発見の火葬墓について」『北海道考古学』十七

菊池徹夫一九七〇「擦文式土器の形態分類と編年についての一

試論」『物質文化』十五

一九七九「擦文文化の鉄器について」『どるめん』二二

北構保男・岩崎卓也編一九七二「浜別海遺跡」

北見郷土博物館編一九七八「北見市中ノ島遺跡発掘調査報告

書』

児玉作左衛門ほか一九五六「根室国温根沼遺跡の発掘について

て」『北方文化研究報告』一一

一九五九「天塩国豊富遺跡の発掘について」

『北方文化研究報告』十四

河野広道一九三二「胆振国千歳村火山灰下の竪穴遺跡」『人類学

雑誌』四七(5)

河野広道ほか一九五九「神居古潭遺跡発掘報告」

河野本道一九六四「天塩町川口基線遺跡の発掘資料報告」『アイ

ヌ・モシリ』七・八

駒井和愛編一九六三「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡」上

卷

擦文文化の終焉

一九六四「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡」下

卷

小柳正夫ほか一九七一「チカプノツ遺跡発掘調査報告書」『もう

ぺっと』二

前田潮一九七六「北海道の内耳鍋について」『古代・中世の社会

と民俗文化』

松田猛一九八〇「釧路地方の擦文土器について」『釧路市立郷土

博物館紀要』七

峰山巖・宮塚義人編一九八一「オピラウシュペツ遺跡」

野村崇編一九六九「空知の文化財」一

一九七七「石狩川中流域の先史遺跡」

大場利夫ほか一九五五「桧山南部の遺跡」

一九六〇「女満別遺跡」

一九六一「上ノ国遺跡」

一九六三「苫前町香川遺跡調査概報」『北海道の文

化』特集号

一九六五「大樹遺跡」

一九六六「恵庭遺跡」

一九六七「千歳遺跡」

一九七一「天塩川口遺跡」

大林太良一九七四「民族学から見たアイヌ文化の構成」『北方の

古代文化』

大井晴男一九七〇「擦文文化とオホーツク文化の関係について

て」『北方文化研究』四

一一九（二一九三）

一九七二「北海道東部における古式の擦文式土器について」『常呂』

大沼忠春一九七二「遺跡・遺物からみた別海の歴史」『浜別海遺跡』

大塚和義ほか一九七五「海獣狩猟民・オホーツク文化の源流」『どるめん』六

桜井清彦一九七一「青森県小館遺跡の調査」『考古学ジャーナル』六二

一九七三「青森市沢田A遺跡の調査報告」『北奥古代文化』五

佐々木達夫一九七九「津軽出土の陶磁器と日本海交易」『白水』七

佐藤和利ほか一九八〇「紋別市ウブナイ遺跡の発掘調査報告」『もうべつと』一一

佐藤忠雄一九六五「先住民族の足跡」『佐呂間町史』

一九七九「北海道西南部の擦文文化」『どるめん』二二

佐藤隆広ほか一九七六「江差町厚沢部川河口遺跡の採集資料」『松山考古学研究会会誌』五

一九八〇『ホロナイポ遺跡』

一九八一『ホロナイポ遺跡』II

佐藤達夫一九六四「モヨロ貝塚の縄文・続縄文及び擦文土器について」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻

一九七二「擦紋土器の変遷について」『常呂』

路市立郷土博物館紀要』一

沢四郎ほか一九六五「北海道阿寒町下仁々志別下仁々志別堅穴住居址発掘報告」『北海道阿寒町の文化財』先史文化篇二

一九六九「北海道東釧路遺跡の堅穴発掘報告」『考古学雑誌』五五(1)

一九七一「弟子屈町下鎚別遺跡発掘報告」

一九七四「釧路市貝塚一丁目遺跡調査報告」第四次調査」

一九八一「釧路市春採台地堅穴群の調査」『釧路博物館報』二六七

沢四郎・松田猛編一九七七「弟子屈町矢沢遺跡調査報告」第一次調査」

沢四郎・西幸隆編一九七五「釧路市北斗遺跡調査概要」

関秀志一九六九「初山別遺跡発掘調査報告」

関秀志ほか一九六九「昭和四三年度羽幌町天売遺跡発掘調査概要」『北海道考古学』五

斜里町教育委員会一九七〇『ピラガ丘遺跡』

一九七二『ピラガ丘遺跡』第II地点発掘調査概要」

一九七六『ピラガ丘遺跡』第III地点発掘調査報告」

杉浦健一一九五二「沙流アイヌの親族組織」『民族学研究』一六

(3)・(4)

鈴木公雄一九六五「チャシの性格に関する一試論」『物質文化』

六

高杉博章一九七七 a 「擦文式土器」『石上神社遺跡発掘調査報告書』

書

一九七七 b 「本州における擦文文化の様相」『考古風土記』二

記』二

東京大学文学部一九七二「常呂」

一九七七「岐阜第三遺跡」

一九八〇「ライトコロ川口遺跡」

富水慶二一九六八 a 「北海道白糠町の先史文化」二

一九六八 b 「北海道白糠町の先史文化」三

一九六九「和天別川河口堅穴住居址群遺跡調査概要(第三次調査)」『北海道考古学』五

一九七〇「白糠郡音別町の擦文文化遺跡調査概報」『北海道考古学』六

豊原熙司ほか一九八一「植別川遺跡」

宇田川洋一九六五「厚田村聚富土上遺跡発掘調査概報」『アイヌ・モシリ』一〇

一九七九「七〇年代擦文文化の研究」『どるめん』二二

一九八〇 a 「北海道の地名に残るチャシ史料集成」『史流』二一

一九八〇 b 「擦文文化」『北海道考古学講座』

上野秀一編一九七四「N一六二遺跡」

一九七九「K四四六遺跡」

一九七九「K四四六遺跡」

一九八〇「K四六〇遺跡」

氏江敏文ほか一九七九「名寄市智東天塩川掘削工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」

渡辺仁一九六六「熊狩と熊祭をめぐる」『北海道青年人類学研究会会誌』八

一九七二「アイヌ文化の成立」『考古学雑誌』五八(3)

一九七四「アイヌ文化の源流特にオホツク文化との関係について」『考古学雑誌』六〇(1)

山崎博信一九七〇「紋穂内遺跡」

山崎博信ほか一九六五「開生遺跡」

八幡一郎ほか編一九六六「北海道根室の先史遺跡」

横山英介ほか一九七五「石狩・八幡町遺跡ワッカオイ地点発掘調査報告書」

米村哲英一九七二「寒河江遺跡」

吉岡康暢一九七九「北海道の中世陶器」『日本海文化』六

吉崎昌一ほか一九七九「紅葉山砂丘における考古学的調査報告」

一九八〇「K四六〇遺跡」

氏江敏文ほか一九七九「名寄市智東天塩川掘削工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」

渡辺仁一九六六「熊狩と熊祭をめぐる」『北海道青年人類学研究会会誌』八

一九七二「アイヌ文化の成立」『考古学雑誌』五八(3)

一九七四「アイヌ文化の源流特にオホツク文化との関係について」『考古学雑誌』六〇(1)

山崎博信一九七〇「紋穂内遺跡」

山崎博信ほか一九六五「開生遺跡」

八幡一郎ほか編一九六六「北海道根室の先史遺跡」

横山英介ほか一九七五「石狩・八幡町遺跡ワッカオイ地点発掘調査報告書」

米村哲英一九七二「寒河江遺跡」

吉岡康暢一九七九「北海道の中世陶器」『日本海文化』六

吉崎昌一ほか一九七九「紅葉山砂丘における考古学的調査報告」

一九八〇「K四六〇遺跡」

氏江敏文ほか一九七九「名寄市智東天塩川掘削工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」

渡辺仁一九六六「熊狩と熊祭をめぐる」『北海道青年人類学研究会会誌』八

一九七二「アイヌ文化の成立」『考古学雑誌』五八(3)

一九七四「アイヌ文化の源流特にオホツク文化との関係について」『考古学雑誌』六〇(1)

山崎博信一九七〇「紋穂内遺跡」

山崎博信ほか一九六五「開生遺跡」